

と く
徳

ほ う
朋

わがこころのよくて、ころさぬ
にはあらず

まつもと かじまる
松本 梶丸

まつもと かじまる
1938—2008
石川県出身。真宗大谷派
宗務所出版部、研修部勤
務を経て、真宗大谷派本
誓寺元住職。



「無慙愧むざんきは名づけて人とせず、名づけて畜生ちくしょうとす」とは『涅槃經ねはんぎょう』に出てくる有名な言葉であるが、慙愧ざんきなきものとは、人間存在としてのみずからに、罪の意識や、痛みや、恥ずかしさを感じえないものことだろう。(中略)

「だれのともがらも、われはわろきとおもうもの、ひとりとしてあるべからず」。これは蓮如れんにょ上人しょうにんの仰せである。良し悪しという分別ぶんべつの身に付いた人間は、みずからを善とすることにおいて、いかに無責任に多くの人間を悪さばとして裁さいていることだろうか。(中略)

『歎異抄たんにしょう』13章では親鸞聖人ゆいえんぼうと唯円坊の対話を通して、「ひとを殺す」ということについて、親鸞聖人は次のような言葉で結んでおられる。

「一人にてもかないぬべき業縁ごうえんなきによりて、害せざるなり。わがこころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじと思ふとも、百人千人ころすこともあるべし」と。

われわれは、(中略)みずからは、ひとどころか、ねずみ一匹殺せない善人だと疑うことなく信じているのではないだろうか。それに対して親鸞聖人は「一人にてもかないぬべき業縁ごうえんなきによりて、害おほさざるなり」と、仰せくださる。言いかえれば「善人面ぜんにんづらをするな」ということではあるまいか。(中略)。戦争せんそうのもたらす罪惡ざいあくと傷跡きずあとの深さを、身をもって体験した作家おほおか・大岡

昇平しょうへいは戦後、作家としての筆を絶って、戦争の罪業性ざいごうせいの深さを告発しつづけた。その作品『俘虜記ふりよき』の冒頭に、『歎異抄たんにしやう』13章の「わがころのよくて、ころさぬにはあらず」の一語を書きとめている。そのことについて、ある新聞のインタビューにこたえて、大岡は次のように述懐じゆつかいしている。

「戦争中、ジャングルのなかでひとりの米兵と出会った。しかも、むこうは、自分に気がついていない。米兵は確実に殺せる至近距離にいた」と。しかし大岡はその米兵を殺さなかった。なぜ殺さなかったかに言及して、大岡は「自分の腕のなかに鉄砲はあったけれども、この鉄砲を持ったのは私の意思からじゃない。国家がもたせたんだ」と語っている。大岡は『歎異抄たんにしやう』のこの一語を通して、戦争というもののかかわりの恐ろしさを見事に表現している。そして「さるべき業縁ごうえんのもよおせば、いかなるふるまいもすべし」という、親鸞聖人の深い人間洞察どうさつから生まれた悲嘆ひたんを通して、戦争という業縁ごうえんがあたえられたときの人間の恐ろしさを明記している。

（『わが心のよくて殺さぬにはあらず。大地の声をきく』）

慙愧ざんき・・・自分の過あやまちや見苦しさを反省し、心に深く恥じる事。

今回のお話は親鸞聖人による人間観を述べておられます。私たちはいつも自分を「善ぜん」というところに立てて、好き勝手に自分の外の「悪」を裁いているようですが、そんな私は何者なのでしょう。冒頭のお経の言葉では私たちは罪の意識もなく、恥ずかしさも感じない「畜生ちくしやう」であると言当てられています。善人ぜんにんの面をかぶかぶっているが、縁えんによってどんなことになってしまう私。ニュースの出来事が人ごとには思えません。（哲弘 拝）



この「徳朋とくほう」は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。